

## 日本産鳥類記録リスト

川路則友・平岡 考・梶田 学・浦野栄一郎\*・柳沢紀夫・西海 功・金井 裕・池長裕史・亀谷辰朗（日本産鳥類記録委員会）

我が国では、日本鳥類目録改訂第6版が2000年9月に発行された（日本鳥学会 2000）。これは、発行の時点までに収集し得た鳥類記録のうち、学会として採用したものの総リストといえるものである。これまで学会として定期的に目録を改訂してきた意義としては、新記録種の追加記載、既掲載種についての分布地、生息状況の新規、変更もしくは追加記載、最新学名の検討結果の公表などが挙げられる。

従来、当学会では、新記録種の目録への掲載に足る情報源として、鳥類学、生物地理学、動物学一般に関する学術誌に公表されたものをおもに対象としてきた。その理由としては、これらの文献が適切な査読制度を含んでいるために、掲載までに十分検討された情報を含んでいると考えられたからである。その結果、たとえば、日本鳥類目録改訂第6版には、同第5版より50種以上も多い542種が収録された。しかし、そのうち迷行 (Accidental Visitor) としての記録のみが挙げられているものは114種もあり、全鳥種の約2割 (21%) を占めている。さらに、検討中の種として34種・亜種が挙げられており、今後その割合はますます増加することが予想される。事実、各地で、毎年これまで記録のなかった鳥類の観察が続々と報告されており、たとえば、真木・大西 (2002) によれば、目録採録種以外にも82種を加えて日本産鳥類と認識しているという（その場合には、全鳥種のうち31.4%が迷行種となる）。ただし、これらの記録が、今後目録へ追加されるか否かは、後に組織されるであろう日本鳥類目録第7版編集委員会（仮称）による厳密な検討にゆだねられることになる。

一方、目録には既掲載種に関する繁殖分布地の追加、変更などの情報も数多く加えられている。その際にもっとも参考になるのは、検討に足るだけの、正確な確認記録の記述を伴う文献である。このような新記録種の追加公認や新産地の記載の検討には、古くは、いつでも第三者が検証可能な、たとえば採集された標本類をもとに行われてきた

が、近年、観察、撮影された写真をもとに印刷公表された文献を中心に検討されることが多くなった。しかし、これまでこのような検討のための記録が各種について網羅的に収集され、公開された例はほとんどない（過去に、わずかにBrazil 1991で試みられているに過ぎない）。

一方、近年、鳥類記録の発信先は、学術誌に限定されず、各都道府県鳥類目録、地方鳥類誌、各種事業調査報告書、各種会報、研究報告、一般向け鳥類専門誌など多岐にわたっており、近年その多様化がますます進む傾向にある。さらに、撮影年月日と場所を付記した鳥類写真が多く掲載された図鑑類や雑誌の普及による記録情報の大量供給により、過去に比べて身近に数多くの情報が頻繁に提供されている状態となっている。これらは、貴重な記録を埋もらせることなく、一つの方法として公の場へ提供したと言う点で大きく評価される。しかし、スペース等の関係で、掲載された写真についての簡単な記述のみがされていることが多く、記録された際の状況や同定の根拠が全く不明な場合も少なくない。しかし一方では、このような媒体による一般への鳥類記録情報の大量供給によって、野外鳥類観察者の認識と目録掲載状況との間に大きな格差が生じており、この点についての厳しい指摘もなされている（たとえば平岡1999）。

そのような中、日本産鳥類記録委員会が1999年に組織され、過去に何らかの形で文献として出版された日本産鳥類の記録を出来る限り収集・整備する活動を行うこととなった（目的などについての詳細は川路2000を参照のこと）。現在、その活動の一環として、前述のような国内での記録の非常に少ない種の記録についてデータベース化する作業が進められており、収集結果がまとまったものを随時本誌で「記録リスト」として公開することとした。なお、ここで取り扱う記録の少ない種として、手始めに目録掲載種の中から、記録年月日の入っているもの、AV (Accidental Visitor) の

みの記録しか挙がっていないものを中心に記録を収集した。

記録リスト公開の主旨は、まず会員に過去の記録のデータベースとして検討、活用できる材料を提供することである。さらに、リストから漏れている記録について会員に対してさらなる情報提供を求めることにある。また、未発表の記録を持つ会員に対しては、これまでの記録を参考に、自らの記録の位置づけや重要性を確認してもらうことで、早急な公表を促す意図もある。

追加記録については、随時記録委員会で受け付けることとし、記録の充実に努めたいと考えている。具体的には、記録が掲載されている文献のタイトル、著者、発行年、掲載ページ、対象となっている種などを記録委員会宛に直接お知らせ願いたい。

上記の趣旨を踏まえ、今回の公開にあたっては、信頼に足る情報の有無にかかわらず、なんらかの印刷物に掲載されたものを、記録委員会として恣意的な選択をすることなしにデータベースとしてすべて提供することとし、必要に応じて、その文献について簡単な解説を加えることとした。なお、記録の収集対象には、日本鳥類目録改訂第6版のAppendix Bにおいて検討中として扱われている種や全く検討されていない種も当然のこととして含まれる。ただし、この公開により、鳥学会が日本産鳥類目録に追加公認したと言う意味ではない。目録への追加については、前述のように後に組織化されるであろう日本鳥類目録第7版編集委員会(仮称)による検討が必要であることはいうまでもないからである。

なお、今回公表する記録リストの一部は、日本鳥学会ホームページ (<http://www.soc.nii.ac.jp/osj/japanese/home.html>) でもすでに公開しており、随時閲覧可能である。

これから順次本誌に公開する予定の記録リストは、必ずしも分類順には従わず、委員会で検討の終了したものから掲載することとする。現在は、スズメ目ツグミ科鳥類の検討を進めている段階であり、公開もこれに準じて行う。なお記録リストを作成するに当たり、下記の項目に留意した。

- ・記録年月日、記録地域が全く不明のものは除いた。
- ・同じ記録が複数の文献に掲載されている場合、関連文献として扱った。
- ・種・亜種の同定が誤っている記録や引用ミスによる記録なども含んでいる。誤同定については、その点についての指摘や意見がすでに文献として公表されている場合にのみ、解説文中で言及し、関連文献に加えてある。
- ・文献によって記録日が異なっている場合、それが近接していても、表中では別の記録として扱った。
- ・表中の記録年月日、記録場所、記録個体の年齢、性別、記録者、状況は、原則として、その記録の掲載されている文献の標記のままとした(ただし、一部英語を日本語に改めてある。また、「写真あり」と明記されている場合には状況に「撮影」を加えた)。
- ・新聞記事は、速報的要素が強いこともあって記事内容のチェック機能が必ずしも有効に働いていないものが多い、内容に関して責任をもてる人間が特定できないなどの理由から、恒久的な文献として疑問な点が多いと判断されるので、原則的に本表には含めていない。ただし、ある文献中に新聞記事を引用して記録として記載している場合においては、重要なものに限り、当文献の記録として挙げたものもある。

#### 引用文献

- Brazil M. (1991) Birds of Japan. Christopher Helm. London
- 平岡 考 (1999) 日本産鳥類リストを見て~バードウォッチングの世界と鳥学界の連携について~. 鳥学ニュース (70): 7-8
- 川路則友 (2000) 日本産鳥類記録委員会とその活動. 鳥学ニュース (76): 4-5
- 真木広造・大西敏一 (2002) 日本の野鳥 590. 平凡社. 東京
- 日本鳥学会 (2000) 日本鳥類目録 改訂第6版. 帯広

\* 第1期 (1999-2001) 記録委員